

守れる提督ロジヤースの指揮する所たり、其後旗艦「プレシデント」に轉じ提督の直下に在り、ロジヤース兵士を遇すること頗る親切にして且つ人を知るの明あり、深く彼理を愛して望を屬す。彼理の艦中に在るや常に日記を作り、氣候航海及人物等に關し詳に其觀察する所のものを記載せり、此書今も尙ほ海軍の文庫に存して往々史料となるべきものあり、彼理は之れより熱心に砲術其他の技藝を講習し、精勵其務に従事し益提督の用ふる所となる。

偶ま無事に際してロジヤースは郷里に其家族を訪ひ、士官等も亦た上陸して艦中爲めに寂然たるの夜、飛報あり曰く紐育より十八哩許の所に米船某號英艦の強迫に逢ひ其中の二人は捕へらると、彼理之を聞き天明を待ずして短艇に投じ、自ら舵を取りて水夫を勵まし逆風を凌て七十餘哩を走る、途に一人の血を吐き漿を投じて死するも

のあるに至る、薄暮漸くロジヤースの居に達し、提督を乗せて歸り直に用意を整へ出で、英艦の所在を求む、衆皆な其怨を報るの機至るを待つ。數日の後、遙に一船を認む、即ち信號旗を揚げども答へず、此時兩船サンデーフークの南數哩の處に在り、再び其の何の船なるやを問ふに至て、彼直に發砲す、即ち之に應じて交戦十五分間、敵の全く避易したるを見て、強て之を苦めずして戦を止む、翌朝に至て之を検すれば果して英艦「リットルベルト」にして、一橋折れ帆飛び憐むべきの狀あり、其の行く所に任せ、若年なる士官候補生彼理は此時始めて戦場に立て砲火の洗禮を受けたり。

當時米國所有の軍艦は百七十艘に過ぎず、而かも粗惡の木造にして動もすれば用をなさず、士官及候補生を合して其數五百に達すべく、而かも多くは年少にして實驗に乏しく、之に加るに四千の海兵と三千の水夫あるのみ、其武器を問へば即ち不完全を



極めたり。然ごも米國海軍の他に秀でたる一の特色あり、其の拘束の弊なく功績によりて以て兵士を登用せること是れなり、之を以て兵士は皆な各自の義務は其良心と大砲との間に存せるを知り斃れて後已むの風あり、提督ロツジャースの如きは殊に心を此に用ひたるを以て、部下の精銳他に比類なく、而して彼理は常に此人の身邊に在て其爲す所を學べり。

大統領マヂソンは其初の平和を維持するが爲めに頗る力を盡したれども其効なく、國威の益外に辱められ、内は人心の恟々として亦如何ともすべからざるを見るや、遂に千八百二年七月十二日國庫窮乏内閣分裂の中に於て斷然英國に向て開戦を布告したり。當時交通の不便なる其命令の軍中に達したるは同廿一日なりとす、然ごも其一時間の後にはロツジャースの指揮に屬するもの「プレシデント」以下の五艦は早已に進て

洋上に在り、偶ま英艦ナンタケットの近海に在り、「プレシデント」號の認めて追ふ所となる、提督手づから第一砲を放たんことを願ひ出て、船首に在り、彼理此時年十七、泰然として其傍に立ち時の到るを待つ、已にして提督の火を移すや、巨丸忽ち敵艦の上に落ち轟然として霹靂の如し、第二第三之に次て發砲し、或は船を傷け或は人を殺す、提督の望遠鏡を取て此結果を検せんとするの時、意外にも其傍より大尉ガンプルの將に發砲せんとせるもの誤て破裂し、提督は其足を挫き彼理も亦傷く、其他死傷十餘人且つ船體を損す、此中に在て苦戦數時に及び遂に英艦を走らす彼理の學ぶ所實に多かりき、而して之より兩國の軍艦は處々に出沒して互に輸贏を争ふ。此戦や陸に在ては米軍屢々敗北したれども海に在ては著しき勝利を占めたり、彼の「チェサビーク」艦上に於けるローレンスが其の傷き死せんとするの時、尙且つ「船を棄る勿れ」



と叫て以て人意を強からしめ、而して彼理の兄オリバーがイリー湖上に敵を虜にし、其勝をハリソン將軍に報じて、「敵に逢へり而して敵は我物なり」と揚言せるが如き、實に米軍の爲めに萬丈の氣焰を吐きたるものにして、眞に千古史上の快事と謂はざるべからず。

其後提督ロッジャースは再び艦隊を率ひてボストンを發し、遠近に敵を追撃し、又船舶を擒にして其載貨を奪へることも少からずと雖も、遂に勁敵と激戦して赫々の名をなすの機會なくしてニューポートに歸る、而して又彼理が其技倆を見はすも尙ほ他日を待たざるべからざりき、然ども其傍に於ける三年間の服務は、遂に督提をして彼理の爲めに榮進を請はしむるに至り、千八百十三年二月を以て海軍大尉に補せらる、彼理時に年十八。偶ま其母病あり、兄弟四人皆な暇を得て家に歸る、其の家に在るの

時彼理は更に大尉に任ずるの辭令に接す、當時士官の昇進せるもの四十四人、而して彼理は實に其第十四人に位したり。彼理後に他艦に轉せんことを希ひ、聽かれて「ユナイテッドステーツ」號に移り、提督デカターの下に屬す、同艦は英軍の苦むる所となり戦の終るまでニューロンドンの港内に封鎖せられたり。彼理勇氣勃勃而して一事の爲すべきなく、無聊此より甚しきはなし、然ども彼理は亦た此時に於て實に一生の大幸福を得たり、則ち其の最愛の妻を娶るに至れること是なり、其名をジエーン、スリデル嬢と云ひ紐育富豪の女にして、芳紀正に十七、其年「クリスマス」の夜に於て結婚の禮を擧ぐ。幾何もなく提督デカターに従て「プレシデント」號に投じ、東印度に赴かんとして病の爲めに果さず、暫くしてロードアイランドのワーレンに出張を命せられ、此に軍艦「チップェワ」を艦す。然ども此時已に兩國の和議整ひ、千八百十五年二月



十一日英船「フェボリット」此吉信を齎して紐育に入る、如何せん當時未だ蒸氣電信の便なく、和議已に成るも之を知らず、兩軍決死ニューオルレ안의激戦あり、長く史家をして之を恨ましむ。

米國は此戦によりて實に第二の獨立を成就したり、戦争止んで其商業は漸く盛にして事に此に従ふもの益多く、彼理も外舅スリデル所有の商船を指揮して和蘭に赴けるとあり、二年の後再び海軍に入る。

#### 四 亞弗利加の殖民、墨西哥の海賊

米國々會黑人移住法を可決す——シヤープアの殖民地——ペルリ再び亞弗利加に赴く——リベリヤ殖民地の基——海軍に於ける惡疫豫防の首唱——チナーブ海賊の鎮定——ペルリ西班牙語を學ぶ

千八百十九年三月三日米國の國會は黑人移住法を可決したり、之より先き黑人種の米國に輸入せらるゝものに月に夥しく、政府亦た之を抑制するに苦む、之を以て其の一たび奴隷の束縛を脱したるものは之を保護して亞弗利加の一地方に送り、此に米國殖民地を開くの議あり、是れ此舉あるに至れる所以にして、其第一著として軍艦「エリサベス」は乗客并に移住民を合し八十九人を搭載して紐育を發す、別に軍艦「カイアン」をして之と共に行かしむ、彼理海軍少佐として副艦長の事を見る。時尚は嚴寒に際し、其の目的地に近ける頃海水氷結せるがため困難を極め、兩艦相互に失す、辛ふ



じて「カイアン」號のシーラレオンに入りたる時は「エリサベス」號はシャープロに在るを發見せり、器具并に糧食を供へ一隊を同地に送て殖民の事を助けしめ、「カイアン」號は近海に出で、奴隸の賣買に従事せる船舶を搜索す、偶ま艦中に惡疫あり、船をカナリー島のテネリッフに寄せ其の消毒を了るや、彼理は上陸して葡萄牙政府の知事に面して其目的を告げ、且つ約するに答禮を以てせば艦中より祝砲を發すべきを語る、知事答るに、共和國に向て同等の敬禮を表するは葡國の法に非ず、故に同數を以て之に應ずる能はざるを以てす。當時米國の國威尙未だ揚らず他國の輕侮を受くること實に如此なりしなり、彼理は斷然として米國は自國の上に位すべき他の國民ある事を認めざるを告げ、遂に禮を交へずして而して去る。

却説シャープロの殖民地に在りては、氣候不順管に連雨の爲めに家屋を建築するこ

と能はざるのみならず、惡疫大に流行し八十九人の中斃るゝもの二十三人の多きに至る、且其の一たび自由となれる黒人は漸く不從順に赴き、殊に宣教師ベーコンの死したる後は其の亂暴名狀すべからず、而して土人は此有様を見て動もすれば妨害を試んとし統御の困難云ふべからず、斯くて「カイアン」號は同年の暮に至り歸路に就きたり。彼理は此の奇異なる水陸を跋渉して其の得る所頗る大なり、又能く土地氣候等を觀察し、惡疫の流行甚しきを致せる原因を研究し之が防遏の方法を講ず。其翌年米國政府は更に許多の黒人を送り漸次其殖民地を擴張せり、然ども是れ徒に姑息の計に過ぎず宜しく奴隸を米國に禁絶すべしとの議論は、既に此頃より唱道せられたりき。

千八百二十一年七月米國政府は殖民地の監督官としてドクトル、エイルスを載せ、軍艦「シャーク」を亞弗利加に送る。今や彼理は全く自ら指揮者たるべき得意の時節到



來し、且つ惡疫豫防の事に關して其意見を實際に試むべきの機會に逢へるを喜び、此行必ず艦中に一人の患者を出すなからんと期したり。而して其の亞弗利加に著するや、シャープの土地頗る低くして濕氣多く、疫癘斷ることなくして從て殖民すれば絶滅するを見、彼理は此に將來の長計を定むるが爲めに頗る心を致し、監督官と共に別に適當なる地を求めてモントセラドを擇て之に充て、會長等と會して土地讓與の約を結ぶ、之より米國の國旗は此に翻へり遂にリベリヤ殖民地の基となる、其後大統領モンローの名を取り首府をモンロビアと呼ぶ。

「シャーク」號は再び其近海を巡視して奴隸の賣買に従事せる各國の船舶を追蹤す、而して此殘酷なる罪惡を業となせるもの殊に佛葡兩國民に於て甚しく、曾て米國人の此に従事する船舶を見ざりしと云ふ。歸路を西印度に取る、蓋し米國商船の屢々其海

邊に海賊の苦むる所となるものあればなり、年を越て紐育に歸る。彼理は今や無事に此短期なりと雖も而かも甚だ多事なりし航海を了し、而して其初に期したるが如く遂に艦中一人の病に仆るゝものなからしむるを得たり、蓋し米國の海軍に在て壞血其他惡疫の原因を究めて之が豫防の方法を設けたるは彼理を以て唱首となす。

當時墨西哥海上に於ける「チーゴ」海賊の一隊其勢を逞ふし、黒旗を立て快船を走らし、或は人を殺し或は商船を捕へて其貨物を奪掠し、猖獗太西洋の沿岸に及び、爲めに米國の商業を妨ぐることに少からず、政府即ち提督ポーターをして艦隊を率ひて之を鎮定せしむ、彼理の「シャーク」號も亦た其中に加はる。然るに墨西哥の海邊は當時未だ充分に測量せられたることなく、海賊は即ち險に據て出沒自在し討伐頗る難む。彼理は先づヴェーロクロズに達し、其より他の一艦と共に出で、戦ひ、大に賊



を擒にして其虜を旗艦に送る。命あり再び亞弗利加に航し二百三十餘日にして歸る。蓋し海賊は幸に鎮定して餘類なきに至りたれども、今や墨西哥の國亂破裂せんとし、米國の商業は尙ほ頗る危険を免れず、彼理は之に備ふるが爲めに再び紐育を發す、然るも其の軍艦の同國に達するの前、革命已に止み國內平和に歸したるを以て、翌年七月紐育に歸り其家旗と共に消夏の快樂を得たり、此間彼理は西班牙語を學ぶ、後ち大に之にし達、嘗に會話を能くするのみならず併て文學にも通じたるを以て、他日地中海の使命に於て又墨西哥の戰爭に於て、其の之が爲めに貢獻せる所少からずと云ふ。

## 五 米國海軍の黄金時代

希臘に於けるメルリ——軍艦コンコードを指揮して歐洲に赴く——魯庭に於けるメルリ——奇縁ならずとせんや——ランドルフの爲めに妬む所となる——アレキサンドリヤに航す——米國ミネアポリタン政府との葛藤——メルリ深く外交上の手段に鑑る所あり

千八百二十四年七月米國政府は盛に艦隊を繕して歐洲に送る、是れ實に米國海軍の黄金時代にして、其旗艦「ノースカロライナ」號の如きは宏壯美麗當時他に比類なく、而して之を指揮せるは提督ロジヤースにして彼理亦其下に在り、進て地中海に入り、到處に廻航して各國と好意を交ゆ。當時希臘の國民土耳其古の羈絆を脱し其恢復を計らんとして干戈に訴へ、糧盡き住々出で、商船を掠し沿海爲めに騒然たり、米國は堅く中立を表し各國亦た之に倣ふ。偶まバラストの市府火を發し焔々天に漲る、即ち停泊



中の「ノースカロライナ」號より水兵を送て之れが消防を助けしめ、彼理自ら之を指揮し水火の中に奔走して頗る力を盡す、船に歸るの後ち風濕の犯す所となり、以後遂に全く之れが患を脱すること能はず、其死も亦た之に因すと云ふ。此行大に米國の國威を歐洲に揚げ、其商業を盛ならしむるに與て力ありしは論を待すと雖も、彼理の自ら快を寓するは更に他日の行に在りき。

千八百十九年大統領ジャクソンの時、米國の外交は尤も多事を極め特に使節を歐洲に送るの要あり、則ちランドルフを以て之に任じ、軍艦「コンコード」號を具へ彼理を以て之れが艦長たらしめ、同年七月ノルフオークを發す、發するの前彼理は書を海軍省に送り、意見を附して乗組人員を撰擇し、且つ適當なる教官及牧師を得んことを願ふ、是れ彼理が海軍の教育に心を用ひたればなり。

「コンコード」號は先づ倫敦に留り其より魯西亞海に至る、是れ米國の軍艦が魯國を訪へるの始めにして頗る同政府の歡待を受く、嘗に使節の榮のみならず實に海軍の名譽なりき。其の錨をクロンスタッドに投するや、皇帝ニコラス自ら「コンコード」號を訪ひ、艦内を巡覽して大に之を嘉し、彼理以下を「窓前に歐洲全土を見渡す」と聞へたる彼得斯堡の宮殿に引見せり、後ち再び彼理及書記官ジェンクスに謁を賜ひ親しく談話あり、彼の虛無黨の爆烈彈に非命を遂げたるアレキサンダーは當時尙ほ十二歳の皇子たりき、皇帝ニコラス頗る彼理の人と爲りを愛し且つ其技倆を賞して已まず、米國の海軍に如此の人あるは同國の爲めに喜ぶべきを告げ、遂に彼理を魯國の海軍に招聘せんと云ふに至れり。皇帝も彼理も共に骨格魁偉の巨男子にして、相對して殿中に立ち、皇帝は米國の海軍に關して幾多の質問を發し、彼理一々之に答へ而してジェンクス傍



より之を通譯す、皇帝の射るが如きの眼光を以て兩人を睨視せる時は、殆どジエンクスをして一刻も速に同國を去らんことを願ふの思あらしめたりと云ふ、皇帝は亦ジエンクスをも擧げて同國文部に用ひんと欲したり、然れども兩人は共に其厚意を謝し命を辭して而して退けり。

元來特別なる米魯の關係は此時より更に親密を致せり、彼の獨立戰爭の時英王惹爾は兵を魯國に借らんことを求む、時の女王カゼラインは答るに兵の賣るべきなきを以てして斷然之を拒絶したり、是れ第一に米國人民の心に喜べる所のものにして、次で戰爭終りて各國と通商せんとするや、先づ其獨立を認めて對等の條約を結べるも魯西亞なり。不思議にも此の歐洲第一の專制國と共和主義の米國とは同情最も深く、兩國民の大平洋邊海に航海漁業に従事するものに、相互其領域内に出入するの自由を許し

たり、是れ實に米國漁船の彼岸に航するもの多くして、屢々其漂流者を日本の近海に見るに至れる所以にして、而して後年彼理の日本に來る亦た之に因するを思へば豈に奇ならずとせんや。

彼理の露廷に博したる名譽は、狹量なる使節ランドルフをして頗る嫉妬の情に堪へざらしめ、其の大統領に送りたる書中に大に彼理の非を擧げ、艦中の規律嚴に過ぎ水兵を待する奴隸の如くなるを告げ、其の國に歸るの後も虚構の説をなして彼理を非難せり、後ち彼理之を聞き書を送て詳に其妄を辨じ、艦員亦彼理の爲めに事實を明にす。此に於てランドルフは全く信を失ひ彼理は却て益々人の知る所となれり、蓋し兵士の法を犯すものあれば笞刑を行ふは當時の慣例なりしを以て、剛直なる彼理は不得止場合に於て之を施すに躊躇せざりしと雖も、其の兵士を思ふこと實に親切にして常に之



れが爲めに計ること深く、飲酒の害の如き諄々説て之を止めしむるに至れるもの少しとせず。斯くて「コンコード」號はクロンタスッドよりコペンヘーゲンに至り、其よりワイト島を經地中海に至りて艦隊に加はり、更に遠洋に回航して國に歸る、彼理常に學術の進歩に貢献するの志あり、其の歸るや自ら採集せるシ、リーの植物をマサチューセットの植物學會に送り、其の一部をブルークリンの鎮守府に備ふ。

彼理は再び直に船を發し、宣教師カークランド夫妻及其後北極の探檢者として知られたるフランクリンの夫人等を載せてアレキサンドリヤに航す。當時フランクリンは希臘の獨立を助けて之れが爲に力を盡す、夫人は彼理の知己なり、而して常に良人の功を説て自ら誇るの癖あり人皆之を厭ふ、彼理は乃ち常に忍て之に聽き其意を害せざるを力む、同乗者皆な其温情宏量を稱す。アレキサンドリヤに著するや彼理以下埃及

代王の招く所となり盛宴に與かる、其よりナポリに航し、更に海上に賊船を追討してアゼンスに至り米國宣教師を載せて而して歸る。

千八百九年より同十二年に至るの間に於て、米國商船のネアポリタン政府の爲めに沒收せられたるもの頗る多く、而して其要償の請求は拒む所となり紛議長く結て而して解けず、大統領ジャクソン遂に意を決し、提督バターンをして地中海艦隊を率ひ、ネーブルス在留の公使チルソンと相應じて局を結ばしめんとす、彼理の「コンコード」號亦其中に在り、將に紐育を發せんとするの時、偶ま提督ビットル病あり彼理其後を繼ぎ旗艦「ブランデーワイン」を指揮すべき命あり、彼理は其衣服だに改むるの暇なくして之に移り、豫め計を定め用意成りてネーブルスに向ふ。同艦の先づ入て錨を投ずるや、陸に在てはネルソン再び要求を提出して而して拒絶せらる、軍艦「ユナイテッ



ドステーツ」續て來る、更に談判を進むれども好結果を得ず、此時「コンコード」號亦至る、「ボルボン」の政府大に驚き急に砲臺を築き兵を練る、而して尙ほ要求に應ずるの色なし、此に於て「ジョンアダムス」號至る、談判殆ど決せんとして未だ決せざるの時、水天髣髴の間に正に第六艦の至るを見る、此に於て事遂に局を結べり、是れ實に赫々たる海軍の功にして、米國の爲めに大に其氣焰を歐洲に吐けるもの、六艦ネーブルスの港内に留ること月餘にして別れて各地に向ふ。今や彼理は嘗に艦隊指揮の經驗に止らず併せて外交上の措置に於て深く鑑る所あり、其の後年日本開國の大手腕の如き、蓋し此中より得來れるものなくんばあらず。

## 六 米國海軍の進歩と彼理の功勞 其一

ブルークリン鎮守府に於けるメルリ——海軍教育家として知らる——太平洋潮流調査の任——心を蒸氣作用に潛む——蒸氣軍艦アントンの艦長となる——機關師の養成——近代戦争の一大要具を發見す——ミシシッピ號の築造——燈臺建築視察の爲めに歐洲に赴く——今後の戦争——メルリ復命の結果——海軍大佐となる

彼理は國家多事の秋に際して身を海軍に投じ、已に嶄然として頭角を見はしたり、而して今や理學の道開け世界の事物其面目を革新するの時に當り、其の海軍の進歩を計るに於て更に與て力あるに至れり。千八百三十三年一月より彼理はブルークリン鎮守府に在勸し、提督リツジの下に在て事を見るに至れるを以て、家を紐育に定めて此に其子女を教育するの傍ら、其平素の嗜好に従事するの機會を得るに至れり。

彼理は常に海軍の進歩を計るを以て心とせるを以て、其の此に來るや先づ鎮守府内



に一の研究所を設立し、共に職に在るもの、利益を増し智識の發達を圖らんと期す、偶ま政府此に二層の官舎を建築せんとするの舉あり、彼理即ち書を裁して其希望を陳べ、更に一層を加へ之を以て集會展覽の場所及讀書室等に充てんことを願ふ、直に許されて此に始めて講究會の組織成り之に入るもの頗る多し。初めリッジー提督たるの故を以て之が會長たりしが彼理其後を襲ぎて益力を盡し、又た一雜誌を發行して海軍の事に關する各種の論說等を登載し、且つ常に自ら筆を執れり、他日兵學校の設立を見るに至れるが如き此雜誌の主として之を唱道せるが爲めにして、後ち雜誌は廢絶したれども同會は依然として存し、南北戦争の時の如き、其の政府のために献策する所少々ならず、而して彼理は愈海軍の教育家として知らる。

當時英米兩國共に太西洋の潮流に關して確乎たる定説を得んことを望む、彼理擇れ

て調査の任に當り、ガデーナー島に赴き日夜汲々として之れが研究に従事し、月餘にして其功を奏せり。而して又米國政府は南極探檢の舉を可決して數艘の船を送らんとし、彼理をして之を指揮せしめんとす、然るに彼理は當時恰も心を蒸氣の作用に潜め、之を軍艦に利用せんと欲して其考案に餘念なかりしを以て此名譽ある任を辭したり、左れば今や彼理の成就すべき事業は、實に米國海軍の爲めに蒸氣軍艦を造出さんこと是れなり。

彼理海軍に入り提督ロジャースの下に在りし頃より、數々大發明家フルトンと會して其蒸氣船の試験をも目撃し、各種の議論を審査して深く此研究に意を致せり、左れば千八百三十四年七月政府先づ五千弗を支出し蒸氣船を製して其の安全なるや否やを試験し、次てブルークリン鎮守府に命じて始めて蒸氣軍艦「フルトン」號を築造するや、



彼理を以て之が艦長となすに至れり。

今日に在て殊更に蒸氣軍艦と云ふ、事奇なるが如しと雖も、半世紀前に在ては歐米の進歩も尙ほ今日の如くならずして、頗る之れが發明を疑へり。彼理は今や「フルトン」號の艦長となれりと雖も是れ實に先例なきの職務にして、先づ艦中の規律より、船員の採用士官と機關師との關係、機關師の等級及服制等皆な新に之れが考案を立てざるべからず、而して一方には守舊派の排斥を避くると共に、一方には早く人に示すに之が可能を以てせざるべからざるの必要あり、彼理の苦心慘愴思ふべきなり。已にして築造成り艦中の用意も亦整ひたるを以て、之を港外に試験するに當り、幸にして無事に適當の速力を以て進行するを得たりと雖も、其製造固より不完全にして機關の粗惡なるを免れず、其後再び沿岸を航して益改良すべき諸點を發見せり。

彼理は海軍の面目を改むべき時機到著せるを知り、書を政府に送て機關師を養成すべき學校の設立を勸告せり、政府は其意見に従ひ先づ若干の見習生を「フルトン」號に乗組みしむるに至る、要するに「フルトン」號の成就是世人をして益之に注意せしむるに至り、其の華盛頓に達するや、大統領ジャクソン内閣員と共に親しく同艦を巡覽して大に之を賞し、告るに彼理を歐洲に送て、更に大に此等の研究に従はしめんとするの意を以てしたり。

彼理の成功は嘗に此に止らずして更に近代戦争の一大利器を發明するに至れり、夫れ「フルトン」號の製造は尙ほ不完全にして隨て其進退回轉等も亦甚だ不自由なるを免れざりしなり、之を以て其のサンチーフークの近海に於て各種船舶群集の中を進航するに當り、會ま一船と衝突して立ちに之を破碎したり、當時彼理は陸に在りしが此報



告に接して詳に其状を問ひ、此に始めて機關の裝置にして堅固ならば、蒸氣力は其非常なる速力を以て更に他に之を利用すべき道あるを悟れり、即ち從來の海戦に在ては敵艦を砲撃して之を損傷せしむるを以て唯一の目的となせしに、彼理は今や偶然にも驚くべき撃碎艦の要を發見せるなり。即ち書を政府に送り此目的に向て更に「フルトン」號を試験せんことを乞ふ、不幸にして許す所とならざりしが爲め一時之を斷念したれども、常に其方法を究めて機會の到るを待てり。斯くて米國には遂に「ミシ、ッピ」號の築造せらるゝに至り、又佛國に於ても己に甲鐵艦の成るを見たり、蓋し彼理は嘗に自國人を啓發せるのみならず、併せて歐洲の國民を教育せるものと謂ふべきなり。而して又た軍艦に備ふべき銃砲其他の要具に就きても益考案を凝らし、其意見は直に行はれざるも多くは他日の用る所となれり、後年焉ぞ知らん曾て彼理に親炙して

能く其説に心を傾けたる士官等の多く南軍に投じたるが爲めに、海軍の勢力に至ては能く北軍を凌ぐに足れるものありしを。

今や彼理の功德は燈臺の建築を待て更に一段の光輝を添へんとす。蓋し千八百三十七年以前に在ては、紐育は既に世界の一大市場たるにも拘らず、燈臺の設けあるも甚不完全にして、或は岩礁の航路に當り或は海賊の虚を窺ふ等其危険一にして足らず、月明に乗するに非ざれば夜間容易に港内に入ることを得ず、同年彼理は他の二人と共に命を受けて之が調査に従事し、而して國會は其報告に基き遂に燈臺建築の議を可決し、且つ彼理を歐洲に送て更に之を研究せしむ。彼理は一氣船に乘じ十二日半にして英國に達す、此航海中に於ても常に蒸氣機關の運轉等に注意して、益其の戦争の要具となすに安全なるを悟れり、其のプリストーンに著するや直に其地に燈臺を一覽し、其



より倫敦に到り更に佛國に入る、到る處當時有名なる學士に就て其説を叩き、或は其建築を實見して得る所多し。當時歐洲の各國は國庫を傾けて蒸氣其他新發明の製造に従事し、殊に英國の如きは世界最大の軍艦を造出さんとするの企あり、彼理は實に此好機會に際して歐洲に遊べるを以て、傍ら益海軍の事業を研究し、今後の戦争は學術上の争にして、其發明は能く人命を亡すと共に亦た之を救ふの具たるを悟り、其の將來に於ける希望は湧然たり。

其の佛國に在て尤も彼理をして得意ならしめたるは、路易フキリップ王の招きによりて宮中に謁見し、且つ晚餐に列するの榮を得たること是れなり、席定まるや彼理は王と相對して賓客の座に就き、王妃自ら茶を注て彼理に薦め歡待至らざるなし。彼理は此榮譽を擔ひ事を了して國に歸るや、直に華盛頓に復命し且つ國會に向ひ滿腔の熱

心を寫して燈臺の建築に關する所見を陳ず、此結果歐洲に向て紐育を發する航海者の最後の紀念として、今尙ほ高くネバーションクハイランドの上に屹然として輝ける燈臺を見るに至れるなり、之より燈臺は全國到る處に建築せられ、且つ精巧を極むるに至れり。其後千八百五十二年政府は遂に燈臺局を設立するに至り、彼理をして之に長たらしめんとしたれども、當時彼理の抱負は益大にして、且つ此頃には日本に關する思想も已に其胸底に發芽しつゝありしを以て、辭して之を受けざりき。

却て説く、千八百三十七年は實に彼理の爲めに記憶すべき年にして、其の二月九日を以て進て海軍大佐に昇任せり。



## 七 米國海軍の進歩と彼理の功勞 其二

技術家一變して文學者となる——其兄オリバーの傳記——ワシントン、アーヴィング——ハルリミレッドフ井ールド、其國防論——砲術の研究——米國政治上の腐敗——ブルークリン鎮守府の長官となる——海軍少將に進む——蒸氣軍艦の開祖——陸上の務に服する十年

千八百三十九年彼理歐洲より歸るの後ち、紐育タリイタウンに近きハドソン河邊眺望に富める地に風流なる一屋を建て、朝夕自ら前庭の花木に灌し或は屋後の菜園に耕し以つて樂む、其近隣には諸名家の閑居多く、出ては之と交遊し入ては机に凭て書を繙く、今や此の蒸氣機關の研究を以て多忙なる技術家は忽ち一變して優美なる文學者となれり、英雄の胸中眞に閑日月ありと云ふべし。當時彼理の兄オリバーは已に死し、而して其赫々たる功名に關して世評も亦甚だ區々たり、其友人マッケンジー爲めに一

書を著して其傳記を詳にせんとす、彼理は之を助けて多く其材料を與へたり。大文學者ワシントン、アーヴィングの居も彼理の家と相對し呼べば即ち答へんとす、兩人常に相往來して交情密なり、且つ共に好てアヂソンの文を評し、若くは共に舟に乗じて近海に遊べり、記者ウェツプも亦た其地に在りて彼理が生涯の良友なりき。

彼理の考案は總て實地の經驗に基き、而して學理上の應用に至ては之を有名なるレッドフィールドと計り、事多くは期する所の如くなり、而して其結果は即ち米國海軍の進歩に與て力あるに至れり。彼理は深く近代戰爭の秘訣は其進退出沒を神速にして勝利を瞬間に制し、以て敗者をして償金を出さしむるに在るを悟り、而して米國の海防甚だ堅固ならずして、再び英國と開戦するが如きことありとするも、其命令の能く軍中に達せざるに先ち敵艦早く其沿岸を衝くを得べきを以て、宜しく之れが守備を嚴



密にすべきを主張し、而して詳に調査を遂げて之れが計劃を成せり。レッドフィールド亦た頻に此問題を新聞雜誌に論じたることあり、其後彼理は「フルトン」號を以て更に幾多の試験をなし、如何にして船體の敵の砲撃に堪べきかを世に明にしたり。

偶ま當時に在て其製造の最も鞏固にして且つ廿六砲門を備ふと稱する佛國軍艦の米國に來航するに逢ひ、政府は益々海軍擴張の急を感じ、千八百三十九年五月彼理に命じて砲術の研究をなさしむ、即ち直に之れに應じ、地をサンデーフックの近傍にトして此に射的場を設く、是れ實に米國に在て砲術を講習するの始にして、近くは「ダイナマイト」の試験に至るまで常に此所に之をなすに至れり。彼理は之より或は學理により或は實際に照して日々之が試験をなし益好結果を得たり、蓋し此時まで米國に在て未だ何人も爆裂彈の用法を知る者無かりしを以て、彼理は力を盡して之を教授し士

官等の之に長ずるもの漸く多きに至れり。彼理は又請ふて茲に學校を設けて一二の軍艦より若干の生徒を撰び、砲術の外蒸氣機關の作用等をも講習せしめたり、之を以て此學校より卒業せる者は當時最も海軍の技に通じ、他日墨西哥及南北戦争等に於て著しき功績を見るを得たり、彼理は更に各科の學に心を潜め、歐洲最近の發明に注意して常に其意見を政府に上申し、電氣の使用等に至るまでも之を研究して餘蘊なかりき。然るに當時海軍に在ても守舊家の此等新奇の發明を喜ばざるは、恰も宗教上正統派の新説に對するが如くなりしを以て、彼理は爲めに幾多の難關に會したりと雖も幸にして著々改良の緒に就くを得たり。

ジャクソン大統領たるの時米國政治上の腐敗は其極に達し、餘弊延て海陸軍の中にも及べり、ヴァンビューレン其後を受けて専ら此弊を矯正するを急務となし、先づ



アーヴィングを擧げ海軍卿となさんとす、アーヴィング之を諾せずして其親友ポール  
 チングを薦めて之が任に當らしむ、然るにポールチングも亦たアーヴィングと同じく  
 其本色は文學者たるに在り、政治上殊に軍務の事を得意とするものに非ず、彼理平生  
 清廉を以て自ら持し敢て人に于めず、ポールチング深く彼理の人と爲りを信じ、之  
 を大統領に薦めてブルークリン鎮守府の長官となす、是れ實に彼理自身にも意外の命  
 令にして爲めに一驚を喫したり。ポールチングは別に書を彼理に寄せて、告ぐるに軍  
 務の事は明に政府の之に干渉し、若くは政治上の異見によりて之を左右すべからざる  
 を以てし、海軍改良の事を擧げて殆ど彼理に一任したり、彼理の進て海軍少將の任に  
 當り將旗を掲ぐるに至れるも此時に在きり、然ども實際に於ては千八百六十二年即ち  
 彼理の死後四年迄は、米國には將官の位なくして單に名稱に止り、其責任の重大なる

にも拘らず特に之を待偶するの途なく、依然として大佐の待遇に在りき。

國會は益々巨額の金を支出して海軍の進歩を計る、而して之に伴へる彼理の功勞は、  
 今や萬人の認る所にして、皆な彼理を以て蒸氣軍艦の開祖なりと呼び、「ミシ、ッピー」  
 及「ミヅリー」兩艦の成功を見るに至れるが如き盡く之を彼理の力に依るとしたり。此  
 兩艦築造の事は彼理歐洲より歸るの後ち幾何もなくして決定せられ、而して其調査設  
 計より工事の監督船材の撰擇に至るまで悉く自ら之に當り、畢生の力を盡して之を遂  
 行したるを以て、當時構造の兩艦の右に出るの軍艦なく、特に「ミシ、ッピー」號の如  
 きは其費す所五十余萬弗に達せり、蓋し是れ米國海軍の始めて造出せる蒸氣艦たるを  
 以て、毫も其費用を吝まずして善を極め美を盡したり。此巨大なる姉妹艦の正に落成  
 して靜に水上に走り出たる時は、見るもの皆な之を誇らざるはなく、彼理の喜は實に



手の舞ふを知らざりき、蓋し此結果は實に米國海軍進歩の一段落を成したるものと云ふべきなり。

彼理陸上の務に服すること此に十年、而して此間専ら學術上の研究に身を委ね、而して蒸氣軍艦の創造より其他有らゆる戰爭要具の改良せらるゝもの、多くは彼理の力によらざるはなく、其功勞は實に米國海軍の進歩と伴へり、若し夫れ南北戰爭の時に當て出沒鬼神の如く、二十ヶ月の間に六十五船壹千萬弗の貨物を沈沒若くは捕獲して、其威猖獗殆ど合衆國の制海權を粉碎せりと稱する有名なる「アラバマ」號が、遂に「カーサージ」號の窮追する所となりて佛國の近海に最後を遂ぐるや、其の發射を司りて一發の下に能く之を水底に葬らしめて以て赫々の名をなせる士官ゼームス、ソーントンは、實に彼理の親愛せる徒弟たるを知らば、以て彼理が米國海軍の薰陶者たるの功

勞を證して餘あるに非ずや、斯の如くにして彼理の米國海軍の進歩に伴へる關係は常に離るべからざるものあるなり。



## 八 亞弗利加に於ける三年

奴隸賣買の鎮壓——ベリビー土人を懲らす——モンロピヤの市街——悪疫の害毒——  
提督スキナー來てペルリに代る——アナポリス兵學校の設立

次に彼理を要して其技倆を見はさしむべき事件は、大統領ハリソンの時ウェブスターとアッシュバートン公によりて締結せられたる有名なる英米兩國の條約に基けり、此條約により當に多年紛糾せる領海問題を定めたるのみならず、同時に兩國力を合せて奴隸の賣買を鎮壓せんことを決したり、蓋し此卓絶なる兩政治家の力によりて兩國幸に平和の關係を保ち、且つ相助けて人類の福祉を計るに至れるなり。此を以て今や米國は其目的に隨ひ艦隊を艦して亞弗利加に送り、併て其殖民地を保護せんをす、而して之を指揮すべき命令は先に與て此事に力ある彼理に下れり、之を千八百四十三年二

月となす、而して其六月五隻の軍艦を率ひて而して發す、之を彼理が亞弗利加第三の航海となす。

之より先き米國商船の亞弗利加沿岸に來るもの往々ベリビー土人の苦る所となり、乗組員の慘虐なる死に逢ふこと前後二回に及ぶ、故を以て、彼理のモンロピヤに著するや先づ土人に向て之れが談判をなさざるべからざるあり、彼理は徐に之れが計を畫し、平和の處置によりて其罪を正すは土人の虜を得るに若かざるを悟り、命を授け一艦を裝ふて商船の如くし、僅かに數人を甲板に立たしめ以て其沿岸に近かしむ、土人之を認るや直に舟を走らして到る、其數人の正に來つて艦上に攀るや、空砲忽ち一發、土人大に驚き皆先を争て遁る、即ち其の艦中に在るものを縛して歸る。

斯くて彼理は上陸してリベリアの知事と共に會長を會し、談判數回にして而して要



を得ず、加るに往々土人來襲の虞あり、彼理一日會長クラックオーを面責すること嚴なり、會長多力起て彼理を害せんとす、彼理亦た力を出して之に向ひ取て屋外に投ず、兵士直に之を射撃す、傷を負ふて益猛烈其狀暴虎に似たり、彼理命じて其村落を焼かしめ、先に商船の奪掠せられたる國旗及武器等を得たり、土人逃れて林中に入り屢彼理の軍を狙撃せんとするを以て、之を四方に追撃す、然とも殺傷甚だ稀れにして、要するに其威を示して以て局を結ぶを力めたり。其の進でグレートベリビーに向ふや、其王白旗を掲げて和を請ひ、自ら旗艦に來て爾今米國の船舶を保護すべきを誓ひ且つ物品を交換す、此に於て其虜を許す。彼理の施したる此策略は實に能く機に臨み變に應じたるものにして、其後土人は再び沿岸に村落を築て貿易を勉め、常に好意を米人に表して亦た其の殖民地を害するが如きことなかりき、彼理は其後モンロビアに歸り

更に各地を回航したり。

彼理の初め「カイアン」號に乗じて來れる頃には、此地は誠に猛獸の巢窟に過ぎずして、其後「シャーク」號を指揮して來り殖民地を卜するに當ても、尙ほ蠻煙の中に鎖されたるモンロビアの地は今や數個の殖民會社の爲めに開拓せられ、五百餘戸の市街となりて教會學校法廷及印刷所等も備はり、海岸には常に船舶の横はるありて商業も稍や盛に、居民皆な安堵せる生活をなせり。而して今や進歩せる黒人の目より見るも其同種族の野蠻賤劣の狀侮蔑すべきものあり、此殖民の勢力により能く土人の開化を促し以て奴隸の賣買を妨げんとせば、益之が繁殖を奨励せざるべからず、而して其の他日リベリヤ共和國の存在を見るに至る迄には固より幾多の變遷を經過し、而して米國政府は終始此共和國の發達を助けて亞弗利加に於ける商業を保護し、併て土人を文明に



導くを以て目的とせり、彼理は實に之れが創業に與て大なる力ありしなり。

而して又た移住せる黒人は容易に此地の氣候に慣るゝを得れども、白人に至ては之れが害毒を免るゝこと難く、來て此に住せんとするには實に生命を賭せざるべからず、彼理は年來大に心を此に用ひ、而して其の衛生上の意見は已に一般に海軍部内に行はれ、艦中に在ては殊に嚴重に其豫防規則を守らしめ、兵士の上陸するものは時を定めて夜氣に觸るゝの前必ず歸艦するを例とせり、偶ま一艦を某地に送て土人の暴擧に備へしむるや、忽ち艦中に惡疫を發して乗組員の過半は爲めに斃るに至り、醫員は其規則を嚴守せざるに因るとなし、艦長は之を不得止に出るとなし、其間激烈なる争を生じて之を彼理に訴ふ、彼理聞て自ら悲み、益心を盡して豫防の事に従ひ、辛ふじて危機を脱出するを得たり。

如此にして兵士等の亞弗利加に死するものあるも之を葬るの地なく、葡領の墓地を借らんとすれば舊新兩教の異同あるを以て之を許さず、爲めに或は水中に沈め或は海岸に埋めて空しく不祀の鬼たらしむ、彼理深く之を遺憾とし金を醸して便利の地を購ひ、土を平にし石堀を作て之を繞らし以て堅固なる墓地を設け、其の何人たるに論なく死者を之に葬ることを得せしむ、其後英國水兵の死せるもの亦た之を此に葬る、英國艦隊長ジョンズ書を彼理に寄せて其厚意を謝したることあり。

當時英國は三十艘の艦隊を亞弗利加の沿海に備へ、佛國も亦た十一艘を送り、其他の各國皆な力を致して専ら奴隸賣買の鎮壓に従事し、拿捕する所の船舶頗る多し。彼理の此間に處して誠心其職を守り、自國の國旗に光輝を與へんことを是れ力め、而して往々各國との交渉事件あるや、毎に其のアヂソンを學んで得意の筆を驅り、應答明快



大に外交家の技倆を見はしたり。提督スキナー來て代るに逢ひ彼理は千八百四十五年四月を以て國に歸る、蓋し彼理が亞弗利加に於ける三年間の任務は實に著しき功を奏したりと謂ふべきなり。

米國海軍兵學校設立の議論は漸く此年に至て其果を結ふに至り、多數の創立委員を撰で費府に會す、彼理固より其中に在り、卒先して之れが計畫に従事し、遂に地をアナポリスに卜して此に兵學校の設立成る、人皆な彼理の功多きを以て其の撰れて校長たらんことを望めり、然ども命至らずして大佐ブキヤナン之れが任に當る、是れ今も尙ほ有名なる米國第一の海軍兵學校にして、他日彼理の爲めに開かれたる日本の子弟が此に教育を受けて有爲の士官となり、拔群の功勞あるもの少からざるを思へば、事の甚だ因縁あるを覺ゆるなり、日清戦争の起るや、米國海軍社會の爲めに片唾を飲

んで其勝利を待設けたるもの豈偶然ならんや。



## 九 墨西哥戦争と彼理 其一

ペルリ役に赴かんとを求む——先づタバスコを攻めて之を陥る——新艦隊長としての  
 ペルリの意見——海陸の鋭をヴェーロクロースに集む——將軍スコットとペルリ——  
 一日中のペルリの多忙——其士官

米墨國境の問題より延て葛藤を生じ、兩國遂に干戈に訴へ以て事を決するの已を得ざるに至れり、而して假令當時米國人民の感情及墨西哥政府の亡狀は如何なりしにもせよ、史家バンククロフトをして、「其曲合衆國に在り是れ世界の知る所にして亦た正直なる米國人民の認むる所なり」との宣告を下さしめたる此戦争は、千八百四十六年の初め大統領ポークによりて其開戦を布告せられたり。彼理は此役に赴かんことを求め、同年八月を以て「ウイキセン」及「スピットファイア」の兩艦を指揮すべきことを命ぜら

る、其出發の用意恰も整ふの時更に「ミシ、ッビー」號に轉すべき命あり、其職權は寧ろ縮小せるものありと雖も、却て精銳にして且つ熟練せる軍艦の國の爲めに盡すの機會多きを喜び直に之に應ず、况や同艦乗組の士官の多くは曾てサンデーフークの學校より出て親しく彼理の教を受けたるものなるを以て、皆な其下に立て之れが用をなすを喜ぶに於てをや、其九月を以て敵地に達す。

當時の艦隊長提督コンナー數々機を失し、曠日彌久、兵士徒に武器を磨して之を施すに所なく、而して終に海軍の名をなす能はざるを恨む、然るに之に反して陸軍の捷報は續々として到る。彼理之を遺憾となし、先づ乞ふてタバスコを攻むるの計を定め、「ミシ、ッビー」號の外更に六艦を率ひて之に向ひ、一舉にして此を破る、各國の官吏并に居民其市街を全ふせんことを求む、彼理は固と戦はんとする所のものは獨り



敵軍に在るを以て之を聴くも、墨西哥の兵市街を去らず、且つ出で、米軍を襲ふや、其無法を怒り遂に砲撃して全く之を平ぐ、是れ實に此戦争に於ける海軍第一の勝利にして、軍氣爲めに大に振ひ彼理の名益々鳴る。

其後彼理は米國一婦人の内牒によりてタムピコの備なきを知り、提督コンナーと共に進て其虚に乗じて直に之を陥る、此地頗る要害の所たり、而して米國の陸軍は皆な遠く北方にあるを以て、彼理はコンナーと謀り其の得意の「ミシ、ツビー」號に乗じてテキサンの沿岸に至り、其勝を通して之を守るべき兵を送らんことを求め、轉じてニューオルレヤンに至りルイジアナ州の知事に面して説くに緩急を以てし、五十の兵と武器を得即日之を載せて直にタムピコに歸る、其の先に同地を出しより一週間を過ぎず、衆皆な其の神速にして能く機に處するの巧なるに驚嘆せざるはなし。

偶ま軍中惡疫流行の兆あり、彼理即ち氣候溫和の地を占領して此に兵士を上陸せしめ且つ新鮮なる糧食を得んことを計り、乞ふて「ミシ、ツビー」號を合せて四艦を率ひ南東の方ラグナに向ひ、容易に之を降して其目的を達するを得たり、而して彼理が其市民を制御するの宜しきを得たるを以て、商業は依然として行はれ市内平穩にして且つ繁榮せり。斯くて兩國の和成るの後も市民米國の徳を欽慕し、墨西哥政府の能く其保護を與ふるに足るに至る迄は、彼理の其兵を撤せざらんことを希望するに至れるが如き豈に榮ならずや。

此間陸軍も亦甚だ逡巡して其戦功初の如く著しからず、總督スコット將軍政府の命によりて一旦歸國し、新に戰略を畫し、海陸力を併せて並び進で首府に入り此に其局を結ぶの計をなす。偶ま「ミシ、ツビー」號破損し彼理華盛頓に歸りて之れが檢閲を求



む、修繕六週間を要すと稱す、彼理は今や焦眉の急場に際して長く時日を空過せんとするを恐れ、其舊友にして曾て機關士たりしハスウェルと計り、自ら督して之れが工事を二週間に竣るを得たり、此間彼理は數々軍議に與り傍ら新艦の築造に董る。應に再び發せんとするに當り命あり、曰く行て提督コンナーに代り墨西哥の艦隊を指揮すべしと、是れ一はコンナーの期已に満ちたるに出づと雖も、亦以て彼理平生の功績に因らずんばあらず、此大任を負ふや、彼理は書を政府に致して具さに數條の意見を開陳し、宜しく其の戰費に足るべき償金を得ば以て可なりとなし、成るべく血を灑ぐことの少くして早く平和の局を結び、益兩國の利益を増進すべきことを説きたり、此の如きもの實に此新艦隊長が抱く所の主義なりき。

今やヴェーロクローズの地は戰爭の中心點となり、海陸其銳を集めて此に凱歌を舉

げ以て首都に進入せんとす、彼理亦正に艦隊を指揮して此に達す、而して其のコンナーと交代せるも此時に在り、旗章上り大砲鳴り、忽にして之を軍中に傳ふ、是れ實に千八百四十七年三月廿一日にして、海軍卿は書を彼理に寄せ、今や米國々旗の下に於ける未曾有の大艦隊を指揮す宜しく之によりて勳功を奏すべきを獎勵す。而してスコット將軍は此時已に軍を率ひて攻戰に著手したれども、輜重期を失して用意爲めに整はず、偶ま彼理の來るに會し其の數門の爆彈砲を借らんことを求む、彼理曰く「諾矣、然れども余も亦戰はざるべからず」と、スコット更に説て若し之を陸上に致さば其兵之用ひて善く戰はんと告ぐ、彼理斷然之を拒絶して曰く「否矣、海軍の大砲の行く所には海軍の兵士之に従はざるべからず」と、其議遂に整はず。スコットは已むを得ず其所有せる徹々たる大砲を用ひて戰を開く、然れども其終に成す所なきを見るや、再び助



を求めて海兵と大砲とを併せ送らんことを請ふ、彼理即ち之に應じ海陸相合して攻圍の計をなす、彼理の名已に海軍に鳴り而して其の人と爲り亦此の如きものあり、萎靡振はざりし軍氣は頓に復興して皆な其命を聞かんことを樂む。

此日彼理は拂曉に於て已に一船の近海に破壊し闖船六十餘人の死に垂んとせるものを救助し、第八時に至り艦隊長の任を帯び、次にコンナーと共に上陸してスコット將軍を訪ひ、歸艦して開戦の命を傳へ、次て攻撃の準備をなし、スコット及コンナーの荏苒手を下すこと能はざりしヴェーロクロズの城中に在る米國の臣民を救出すべき計を畫し、而して終に其大砲を上陸せしめたるなり、彼理は一日の中如此の多事に當て毫も狼狽する所なく、徐に之に處して餘裕ありしを思へば、如何に其膽度の大なるやを知るべきなり。

海陸の軍既に力を合せて戦を始む、ヴェーロクロズの地繞らすに城壁を以てし、其防禦頗る嚴にして敵軍之を死守す、彼理豫め用意して每艦より必ず若干の兵士と大砲とを出し、部署を定めて均しく其功を分たしめんとす、其士官等はサンデーフックの學校に在て彼理の爲めに訓練せられたる技倆を其目前に見はすの時至れるを喜び、其一發だも之を空ふせざらんことを力めたり、激戦四日に亘り墨軍の勢遂に衰ふ、此に於て計を立て齊しく三方より城中に進入す、彼理亦自ら其中に在り、忽にして城頭白旗の翻へるを見る。



## 十 墨西哥戦争と彼理 其二

常に兵を上陸せしめて勝を得——發黃熱の流行——政府は將士の苦を省るの違あらず  
——兩國の和——歴史家の偏頗——米國海軍更に一進歩をなす——此戦争の結果

ヴェーロクロズ已に陥る、此一戦によりて道漸く通じスコットは其軍を進めて益深く内地に向ひ、彼理は其艦隊を率ひて沿岸に轉戦し、數個の市府を下して城砦を平らげて要害の地は悉く其有に歸し、而して戦争は未だ終を告げずと雖も、今や海軍は全く勝を奏して亦た手を下すべきの地なし、之を以て彼理は堅く諸港灣を封鎖して米國の國法を以て之を支配し、且つ病院を起して惡疫流行の虞に備へ、又其の捕獲したる武器を本國に送り、中數種は之をアナポリスの兵學校に附して練練の用に供せしむ。然而して彼理の此等の勝別を得るや、大抵軍艦を出て兵士を上陸せしめて以て其功を

奏せり、其の地を守るや、營を張りて規律を正ふし進退毫も陸兵と異なる所なし、是れ實に平生彼理の力めて訓練せる所なり。

墨西哥の沿岸發黃熱常に流行し其恐れ戦時に於て甚し、彼理は斷へず心を此に用いたりしも、偶ま「ミシ、ッピー」號火を失し之が消防の爲めに全艦水を被り、而して遂に事なきを得たれども忽ち艦中此病を發す、彼理即ち「ジャーマンタウン」號に移て之を旗艦となし、「ミシ、ッピー」號を本國に送還す、然ども惡疫は益蔓延して近海の商船も亦此患に罹る。彼理已に戦に勝ち、而して更に此の勁敵の猖獗當るべからざるあり、日夜苦心して防禦の策を講じ、遠く諸軍艦を海上に出して傳染を避けしめ、爲めに大に其勢を減すと雖も、兵士の留て其務に服するものに至ては、晝は火熱に晒され夜は凝露を蒙り、加るに毒蟲の犯す所となり其危険言ふべからず、彼理は固より自己



の名譽を貪るものには非れども、其の海軍の著しき戦功に對して政府が獎勵の事なきを遺憾とし、此艱難に當て軍氣を挫折せんことを恐れて、百方兵士を慰撫するに苦心せり。

スコットも亦た一世の名將にして頗る識見あり、當時戰術未だ進歩せず、人は視て多く敵を屠るを以て壯快となし、而して新聞紙の通信亦た此種の記事なくんば讀者を失望せしめんとするの時に於て、彼理と同じく短日月を以て速に勝敗を決し、人命を失ふことの少くして以て其功を收めんとするの志あり。然るに此戦争は固と侵略的の權謀に出たるを以て、政府は將士の苦心を省るに違あらず、寧ろ陸海軍の一擧して突撃に出るなく、却て其戰の遊戲に齊しきを咎むるに至る、然而してスコットは遂に能く首都に進入して之を降し以て赫々の名を成すを得たるもの、誠に一方には彼理が海

軍を指揮して常に沿岸に出沒し、以て敵の勢力を殺ぎたるに由らざるばあらず、而かも彼理は切に陸軍の戦功を稱讚して止まざりき。

兩國和議の成りたるは千八百四十八年二月となす、左れば此戦争は實に三年の日月を費したり、而して其結果として墨西哥は上部カルフォルニヤ、チヴァダ、アリゾナ及ニューメキシコの地を割て之を與へ、而して米國は之に向て千五百万弗を支拂ひ其の占領せる地を還付して以て軍を撤せり。夫れ此戦争の曲直何れに在るも固より將士の關する所に非ず、彼等は只だ政府の命によりて忠實に其職を守り以て善く戦ふの責任あるのみ、然ども彼理は深く强者の其威を逞ふして弱者を壓するを忌み、先に已に其意見を開陳して平和の終局を希望し、從軍の間常に殘虐なる舉動に出るを避け、嚴に命じて奪掠其他苟も軍隊の體面を汚すの行爲を禁止せり。



戦争止みて國に歸るや彼理は再びホドトン河邊の閑居に起臥し、墨西哥より齎せる珍奇の物品を弄して之を樂む、偶まスコット其の戦争中に獲たる墨西哥の國旗數種をウエストポイントの士官學校に送り、且つ之に附記して皆な陸軍の力によりて得たるもの、如くす、彼理之を見て歴史的の事實を誤り且つ海軍の名を傷くるを恐れ、書を同校の監理に寄せて詳に之を辨じ、其の海軍の與て力あるもの少からざるを證す、此書亦た新聞紙の轉載する所となり頗る物議を來す、スコット大に其非を悟り直に加ふるに海軍の文字を以てせんことを求めたりき。然どもスコットが其自傳を作てヴェーロクーズの戦争を記せるの條下にも曾て彼理の名を見はさず、後の史家亦多く偏頗の筆を弄し、徒にスコットの功を誇大にして、詳に當時の海軍を語らず、併せて彼理の名を湮滅せんとするに至れり。

此戦争によりて米國の海軍は更に一進歩をなしたり、則ち其戰術は之によりて益鍛錬せられ、後年内亂の起るに當り、其の南軍に在ると北軍に在るとを問はず、苟も拔群の技倆を見はしたるものは、皆此戰場に於ける實地の學校を卒業したる兵士に非ざるはなし。嘗に之れのみならず、艦中に笞刑を廢し、且つ酒弊を矯むるを得たるも亦此時に在り、戦争の後ち大に是等の利害に關する議論あり、即ち士官をして各其意見を書して之を出さしむ、守舊と進歩の二派は自ら分れて一致すること能はざりき。彼理精勵刻苦海軍の進歩を計ること既に久し、其の多年の經驗に基き詳に意見を述て斷然笞刑の廢すべきを説き、而して漸次酒を節せしめ遂に之を禁するに至らんとを主張す、此事兩ながら決す、然ども其の規律の能く行はれたる所以のものは、寧ろ彼理が道徳上の感化與て力ありしに因ると云ふべきなり。



此戦争に於ける米國海陸の軍は總て八萬人と稱す、而して戰場に仆れたるもの五千人にして、空しく病の爲めに死したるものは一萬五千人に達す、其の費す所は即ち一億五千萬弗にして將士の恩給金等を加ふれば更に巨額となるべし、然るも之によりて得たる領土は百萬方里にして此に米國の富源を發見し、爲めに國運益發展して社會の面目を一變し、文明の潮流は次第に東より西に向て押寄せ、太平洋に臨て其渡を待つに至れり。

## 十一 日本大使命の後ち

更に此人を待つ——經營二星霜にして事を了す——メルリの歸途——ホーソーンと復命書——社交上に於ける光榮——ロードアイランド洲會の決議——メルリの演説——岩倉大使の一行——遠征記の著述——書を總領事ハリスと往復す——メルリの勳功に對する報酬

若し夫れ彼理の傳記をして局を墨西哥戦争の後に結ばしむるも、尙ほ其の半生の功名を成さしめんとす、日本開國の事即ち是れにして、吾人は業に本書の前編を擧て之が記録となしたり、茲には此大使命の後に於ける彼が進退を尋ねんとす。

夫れ彼理の此大使命を帯びて本國を出たるは千八百五十二年十一月にして、今や經營二星霜を費して其事を了す亦焉ぞ歸を願はざらんや、其の琉球より香港に著するや



命あり、曰く「ミシ、ッピー」號若くは英國飛脚船によりて直に歸朝すべしと、彼理は擇むに後者を以てせり、發するに臨み在清の米國人相謀て彼理の勞を犒ふが爲めに一大宴會を催し、且つ贈るに金銀を刻めたる燭臺を以てす、彼理の香港を發せるは實に千八百五十四年九月十一日の朝にして、「ミシ、ッピー」、「マセドニアン」兩號より祝砲を發し、水夫は橋上に上て歡呼三聲す、此に於て英國飛脚船「ヒンドスタン」號は此外交家兼海軍の勇將を載せて靜に港外に向ふ。

斯くて彼理は無事に英國に著し、大陸に入て和蘭に至り、ヘーグ駐在の米國公使ベルモントを訪ひ其家に數日を費す、公使は即ち其の女婿なり、更に廻てリバープールに至る、當時同市に駐在せる米國の領事は實に清文學者ナザニエル、ホーソーンにして、米國が名譽ある文學者を擧げて外交官となすの慣例は已に此時に於て然りしなり、彼

理行てホーソーンを訪ふ、蓋し其の復命すべき「遠征記」の著述に關して謀る所あるが爲めなりき、ホーソーン其職務の爲めに此委托に負けりと雖も、頗る彼理の人と爲りに服して其成功を讃し、且つ此の如きの筆を執るを以て文人の好事業となせること彼れが當時の日記中に見ゆ。

彼理其大使命を終へ名譽を双肩に荷ふて而して國に歸る誰れか之を歓迎せざらんや、只だ夫れ政府の彼を待遇するの法如何、其賞は以て其勞に報るに足るや否や。蓋し此使命たるや「ホイグ」黨の政府より出て、今は即ち「デモクラチック」黨の時代たり、英國諸新聞紙さへ今や頻りに彼理の功を稱讃し、何故に米國政府の此人のために特に表彰する所なきかを怪めり。然るも米國共和政治の下には爵位の譽なく勳章の榮なし、「ホイグ」黨が依然政權を維持したりとするも其の爲す所亦同じく一片の感謝に過ぎざ



るべきなり、只夫れ紛々多事なりし大統領ピアスの治世に光彩を留めたるものは、誠に彼理復命の一事に在ると後世史を讀むもの、認る所なり。此年十二月六日上院は問ふに日本遠征の結果を以てす、大統領が彼理の到着を待ち具さに之れが報告をなせるは翌年一月三十日に在り、斯くて彼理は其四月旗艦「ミシ、ッピー」號の各地を経て紐育に入るに及て、ブルークリン鎮守府に其司令旗を撤して日本遠征の終りを告げ、其より華盛頓に赴て事務所を設け、大尉マリー及ベント其他書記書工等を集めて「遠征記」の記述に従事す。

彼理が畢生の勲業に對して政府の恩賞を受くることなしと雖も、其の社交上に於ける光榮は實に少々ならざりき、紐育市民は贈るに銀皿壹組を以てし、ボストンの市民は記念の金牌を作て之を贈り、別に銀製の模型數千を鑄て有志者に配付す、ニューボ

ルトの人民も亦た盛に宴會を開て彼理を饗應したり。ロードアイランド州由來多く偉人を出すを誇る、而して今又其寵兒によりて日本開國の大業を成就せるを見て州會は彼理の功を表するの決議をなし、且つ贈るに三百十九「オンス」の重量ある銀盆を以てす、其製頗る精巧にして、其面に刻して「提督彼理が日本と條約締結の爲めに本國に盡したる功德を頌せんか爲めロードアイランド州の名によりて之を贈る」と曰ふ、其七月十五日彼理を招待し、州廳の前庭に知事及有名の人士相會して盛典を擧ぐ、當時彼理が知事の祝辭に答へたる演説に曰く、

余の年尚ほ幼にして未だ鐵道若くは汽船の設けなき時、屢茲に立て白帆風を含むでプロビデンスより知事を載せて此に入るを傍觀し、又は撰擧の當日市民の意氣堂々として行進するを目撃せること其れ幾度ぞや、以來余は其職務の爲めに地球の東西



到らざる所なく、今や半世紀を経て、老後の身を以て此親愛なる故郷の代表者たる諸君に招かれ、此神聖なる場所に於て長官の口を経て我が市民の稱讃を受くるの榮譽は、四十六年前余の士官候補生として、其の一生の希望たる海上に向ひ始めて、纜を解きたる當時に於て、實に心に期せざりし所のものなり。

と、ロードアイランドの彼理に於ける實に斯の如し、往年我が岩倉大使の一行が米國を訪へるの日、特に此地に歡待を受けたるもの亦之に因せずんばあらず。今や彼理は懷舊の念禁する能はず、暫く其地に留り日々出遊して以て樂む、某の丘某の水、是皆な彼が少時の記憶に存するものに非ざるはなく、或は祖先の墳墓に詣し或は廢宅の跡を尋ね、戀々として去るに忍びざるものありき。

斯くて彼理は再び「遠征記」の記述に従事し、其第一卷の成るや廣く之を友人其他

遠征の舉を助けたる人々に分つ、此書頗る世の好評を博し四方より言を寄せて之を讚するもの少からず、アーヴィングも書を送て曰く「足下の名以て之を不朽に傳ふべし、能く人命を傷けず一滴の血をだに流すとなくして茲に至る、何人か容易にして此月桂冠を得るものぞ」と、此書は後「アップルトン」會社より出版して世に公にせられたり。彼理は暫く筆硯を抛て塵埃をサラトガに避け以て風光を樂み、其の紐育に歸れるは翌年四月にして、更に第二卷及第三卷の編纂に従事し、今や將に其全部を大成し之を次期の國會に送附せんとす、彼理常に之れが爲めに政府に冗費を出さしめんことを恐れ、中頃人を傭ふを止めて校正印刷に至るまで獨り自ら之に當り、而して又暇あれば則ち毎に書を下田に駐在せる總領事ハリスと往復し、日本に關する注意を怠らずして以て其成功を助けたり。



「遠征記」全く成り博士ホークス之に序し同トームス之れが緒論を作れり、然れども其本文に至ては専ら彼理の筆に成る、若夫れホーソーン其他の名家を假りて之が筆を把らしめば、其の文學的の光輝を添へんと勿論なりと雖も、歴史的の實録としては彼理の自ら之を記述せるの勝れるに如かざるなり。而して又其艦隊に伴へる書工ブラオン及ヘインの寫したる遠征六種の書帖を作て政府に保存し、別に之を模寫して三百冊を印刷し各國の政府に贈れり、「遠征記」は一萬八千部を出版して一萬五千部を國會議員に送り、二千部は海軍部内に配附し、一千部は之を彼理に下與せるを以て其五百部を分て之を博士ホークスに與ふ。嗚呼、是れ僅に此大共和國の政府が此勳功ある提督に對するの報酬に過ぎずして、亦た彼理の取て以て満足せる所のものなりき、然れども國民の心より出たる感謝と稱譽は最高の爵位に勝ること萬々なり、况や彼を忘れざるも

の○は○獨○り○其○の○自○國○人○の○み○に○止○ら○す○し○て○、  
 極○東○日○出○國○の○子○孫○が○永○久○に○其○爲○人○を○景○恭○す○る○  
 に○於○て○を○や○。



## 十二 彼理の晩年

心を學術上の研究に致す——支那公使たらんこす——地中海艦隊長たらんこの説——  
 ヘルリの病に其最期——盛大なる葬儀——舊將を弔するがために集れる水兵——英の  
 ネルソンの死を思はしむ——ヘルリの墳墓

今や彼理は紐育の市中に永住の計を定め職務の餘暇再び心を學術上の研鑽に致す、頗る米國地學協會の擧を賛成して屢之れが會合に出席し、且つ其著に成れる「日本及琉球に關する將來の商業」、及「米國の東洋貿易を發達せしむべき企圖」の二論文は、同會の雜誌に掲載して廣く世人の熟讀翫味する所となれり、又曾て紐育大學の講堂に博士ホークスをして其論文「地理學の進歩及貿易上に新路を開ける結果」を朗讀せしむ、是又其後ち出版せられ、當時「コロムビヤ」大學の校長キング氏は衆に代て謝辭を述べ、其立論の妙行文の巧なるを稱讚したりき。

千八百五十七年三月ブキャナン大統領の位に即きカツス國務卿たり、將軍ウエツブ彼理を推薦して支那に公使たらしめんとす、惜哉其前日ウキリヤム、リード已に北京駐劄の内命を受く、國務卿も亦豫め彼理の此に意ありしを知らざるを憾めりと云ふ。蓋し彼理の此に意ありし所以のものは、其の心を東洋の形勢に潜むると久しきか上に、支那には將に大に事あらんとするあり、而して長く北京公使館の衝に當れる博士ウ井リヤムとは日本の使命以來相知ると深きを以て、之を用ひて共に大に爲す所あらんとを期したればなり。

此年十二月廿八日彼理は報告するに日本遠征に關する記録其他一切の事務全く完了せる旨を以てし、其の華盛頓に於ける事務所を撤して命を待つ。地中海艦隊は米國の海軍士官が故郷以外の天國となせる所のもの、而して今や彼理之れが司令官たらんと



するの説あり、然ども命遂に到らず、斯くて彼理は紐育に在て樂しく其冬を送り、市長其他の響應を受くると數々にして、越て翌年一月「セントラルアメリカ」號沈没事件に關する調査をなし、海上に於ける生命財産の安全を計るが爲めに法規の改正を要すべきものあるを指摘す、此報告も其後一書として出版せられたり。

此の剛毅不屈にして常に進て困難に赴くを知り、嘗て退て休むを知らざる英雄が、今は自己の生命と別るゝの時は近けり。前後二回の戦争、數回外交上の使命、及び日本より歸國後の復命等に關する非常なる苦心勞力は、漸く老後の身神に衰弱を感せしむるに至り、而して此年の二月に犯されたる感冒は遂に此人をして起つ能はざらしめ、加るに其の曾て三十五年前に罹れる瘰癧質斯は再發して彼を惱ませり。然ども其の終に死に臨むまでは、何人も而かく危篤なるべしとは思はざりき、彼れが生死の間に呻

吟すると二旬、病魔は腹部より胸邊に侵入し、名醫の更代も之を治するに由なく、三月四日午後二時溘焉として而して逝けり、享年實に五十四、功成り名遂くる彼の如くなるも、亦た天道是非の嘆なき能はざるなり。而して此報の日本に達したるは總領事ハリスの恰も下田より江戸に入り、而して艦長タトナルが軍艦を率ひて長崎に著せるの時に在り。

彼理の死は世人の擧て痛悼して措かざりし所にして、紐育の大都到る處凶禮を表せざるはなく、有らゆる公堂旅館及港内の船舶皆な半旗を掲ぐると三日に及ぶ、其葬儀は之を「セントマーク」の寺院に營む、儀式盛を極め、先づ紐育の州軍より士官二百人兵卒五百人、之に繼くに合衆國海兵の行列を以てす、州知事及將軍スコットを始め有名の人士多く集る。而して當日特に目撃せる者の心を動したるは、曾て墨西哥戦争及



日本、の遠征に、彼理の下に、其命を聞ける水兵等が、今や、其の故將の最後を弔はんが爲めに、各其職を抛て、遠近より相集まり、一團となつて、以て會葬せること、是れなり。是等の人々は、一様に曾て艦中に於てせる服裝を爲し、而して其額上には各往年の勞苦を印せざるはなく、單調なる鼓笛を鳴らして進む所、却て他の壯大なる奏樂に勝りて人を感せしめたるものあり。寒氣の極めて凜烈なりしにも拘らず、街頭に堵をなすの士民は皆な謹て此名譽ある海軍の勇將を悼み、寺院の鳴鐘と軍艦及兵營より發する砲聲とは、般々として更に其光景を嚴肅ならしめたり。

寺院内の式は彼理と舊交ある博士ホークス、及び彼理の兄オリバーの女婿にして牧師たるヴキントン之を司り、祈禱唱歌總て是れ悲壯ならざるはなく、式了り棺を擁して院後の墓地に葬るの時、海兵其銃口を揃へて三たび發砲す。質朴誠實なる舊水兵等

が其の悦服せる將官の靈に向て最後の敬愛を表し、涙を拂ふて而して解散するや、眞に人をして英のチャルソン死せし時、兵士の會葬せるもの争て國旗を裂き、其一片を得て、以て他日の紀念となさんとしたる悲劇の再演せんかを思はしむるに至れり、此日彼等の哀傷は此の詩的の感情に驅らるゝことなくして止み、星條の國旗は幸に墓上に全きを得たり。

後ち墓をニューボルトに移す、是れ則ち先塋の在る所にして、兄オリバーの碑と共に相列して尊崇せる賢母の墓側に安置し、長く人をして追懷敬慕措く能はざらしむ。彼理の碑は蠟石を以て成り、花崗石の臺上に立てり、單に刻して曰ふ「米國海軍の提督マシユー、ガルブレース彼理の爲めに其寡婦之を建つ」と、嗚呼夫れ彼が功名の赫々として後世に傳はり、而して其の經營慘憺以て開國貿易を促したる日本の進歩今日の如



く○なる○を見、將○た○祖○國○の○隆○盛○無○比○其○勢○世○界○に○冠○た○る○を○知○ら○ば、彼○理○亦○以○て○地○下○に○瞑○す  
べきなり。

十三 人ご爲り

其地位を問へは甲比丹云ふに過ぎず——能く己に克つ——負債を忌むとと蛇蝎の如  
し——交際社會には得意の人に非ず——教を守り行に篤し——善良なる慈母膝下の教  
訓——英雄の跡は歴史を形造る——立志の龜鑑

蓋し米國には千八百六十二年以前に海軍將官の名有て實なく、大佐は實に其最高官  
にして、中に就て特に擧て提督を任するに過ぎざりき、亦以て艦隊の浦賀に碇泊中寶  
刀を取て渠が頭に加へんとせる當時の壯士が、艦長アダムス及ブキヤナン等の服章彼  
理と同じきを見て彼理を殺すも尙ほ之に代て艦隊を指揮し、以て事に當るものあるを  
知て而して躊躇せりと云ふを怪まざるなり。左れば彼理の一生が米國南北戦争以前の  
歴史と大關係を有し、其の戦争及武器の事に精しく、夙に今日に於ても尙ほ解決し得  
ざる科學上の問題に著目し、而して功勞眞に無比なるにも拘らず、其他位を問へば僅か



に「甲比丹」と云ふに過ぎざりき、當時幕吏の偶然にも彼理を呼ふに「アドミラル」の名稱を以てせると、頌揚宜しきを得たりと云ふべきなり。

彼理の部下を待するや恩威兩がら行はれ、人望頗る深く皆之れが用をなすを悦び、其の座乗せる軍艦は常に堂々として偉觀ありしと云ふ。彼は戰に於ても平和に於ても、外交に於ても學術に於ても共に拔群の人物たりしと雖も、彼の眞價は其の能く一身を處して己に克つと云ふにありき。彼は常に言語を謹み、眞實に非れば未だ曾て語らず。彼は嚴格なりしを以て、其部下に踈暴又は狂愚の行爲あるを好まず。彼れ一たび事に從へば倦て止むを知らず、之を以て時に部下に不平の聲なきに非ずと雖も、是れ只彼が正しきを爲さんがために熱心に過るの弊のみ。然ども彼れ時に遊戯を愛して好て笛を弄し、家に於ては子女を嬉ましめ、艦上に在ても往々談笑宜に適せり、蓋し彼を以て

米國海軍の第一人者となすは、曾て其部下に養成せられて海軍の元老たりし將官等の、異口同音に證言する所たり。

彼は常に金錢の關係を慎み、負債を忌むこと蛇蝎の如く、之が爲めに他を煩すを以て軍人の體面を汚すものとし、深く部下を戒めたり。其の少時より獨立の精神に富み、斷して人の助を受けず、曾て一たび窮乏に苦むの時、知人勸むるに某富家の女と婚して其惠によらんとを以てす、答て曰く、「余は如此にして人の助を受んよりは寧ろ地を掘て自己を葬らん」と。

彼理は交際社會には得意の人物に非ず、彼は呐辯にして往々談話に流暢を欠けり、然ども其筆を取るや巧にして、彼の記録中に文法の誤謬を見出すが如きと稀れなり、彼は幼よりアチソンを愛讀して文學の趣味に富む、其の「遠征記」は即ち見るべきなり、



而して彼は「シーザー」の如く常に自己を呼ぶに第三人稱を用ひ、優に米國文學の一家をなせり。

其の敬神の念に富み教を守り行に篤かりしは明かなれども、今其一例を擧れば、曾て「マゼドニヤン」號を指揮して西印度より歸航の途中偶ま一安息日に當り、彼理は甲板の上に一士官を顧み謂て曰く、「余は今正に聖書を讀了れり、余は日課として航海中必ず之を通讀するを以て例となす、天下亦此の如きの奇書なし」と。言半にして橋上「陸よ」の呼聲あり、談話は直に號令と化したりと雖も、如此にして水陸何れに在るも常に心を兵士の感化に用ひ、之を教導して曾て倦まず、其の他日日本の門戸に臨て安息日の禮拜を行ひ、艦上に聖詩を誦せる、豈事を好むが爲めならんや、而して是れ皆な慈母の膝下に受けたる善良なる教訓に基かずんばあらず。

夫れ英雄の一生は即ち歴史を形造る、而して彼理の名は米國歴史の一部たるのみならず、更に日本の開國史上に重きを爲し、外人の名の邦人に尊重せらるゝもの未だ彼よりも大なるはなく、其名は殆ど日本の家什語たり、然ども未だ此人の生涯が能く人間立志の龜鑑たること如此ものあるを知るもの少し、今や日本が戰勝て海國の銳氣振ひ、國民の競て其名を成し其功を立てんとするの時に當り、我が開國に大關係ある此米國海軍の名將を傳す、庶幾くは其裨益する所あらんか。

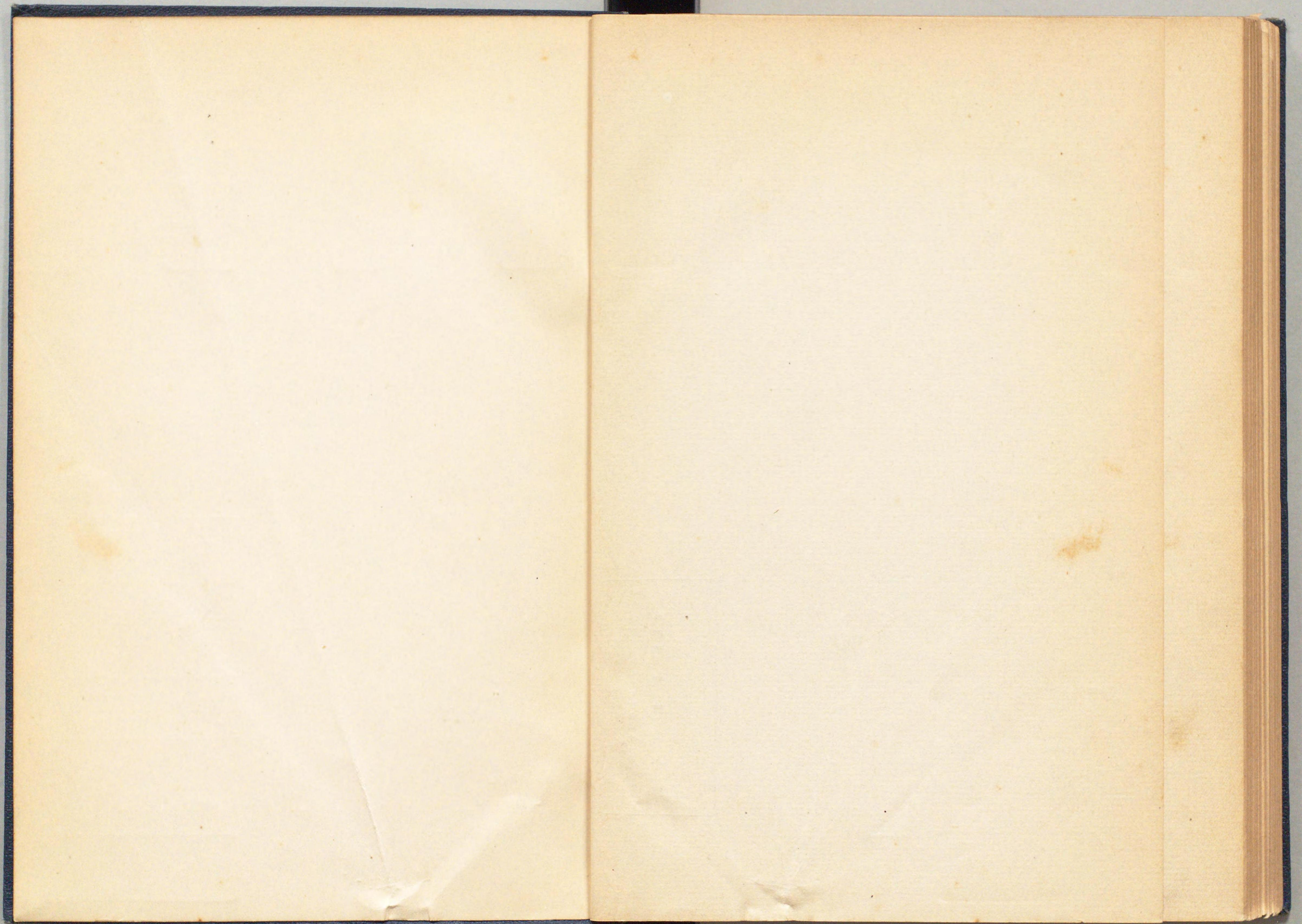
終



横浜市伊勢町三丁目六十一番地

印刷者 柴田繁十郎







1949  
2  
3

11-20-49  
11-21-49  
11-22-49  
11-23-49  
11-24-49  
11-25-49  
11-26-49  
11-27-49  
11-28-49  
11-29-49  
11-30-49

11-28-49



